

原著

## イヌの表情はどのように知覚されるか：性別および飼育経験による影響

野瀬 出\*・柿沼美紀

日本獣医生命科学大学 比較発達心理学研究室

(2023年2月15日受付/2023年3月26日受理)

### Evaluation of gender and experience with dogs on perception of dog facial expressions

NOSE Izuru\*, KAKINUMA Miki

Laboratory of Comparative Developmental Psychology, Nippon Veterinary and Life Science University

(Received February 15, 2023/Accepted March 26, 2023)

**Abstract** : To improve animal welfare for dogs, it is important to understand their emotional states properly. Facial expressions can be used as a tool to evaluate dogs' emotions. In the present study, we asked participants to rate dogs' emotions based on their facial expressions in pictures, and we examined the relationship between the dog facial expressions and perceived emotions using the Dog Facial Action Coding System (DogFACS). We also examined the effect of the dogs' facial expressions on the participants, based on their gender and experience with dogs. The results showed that the facial expression with the mouth slightly open and the tongue showing was perceived as "happy," while the facial expression with the nose wrinkled and the teeth bared was perceived as "disgust/angry". In addition, females who had experience with dogs evaluated their facial expressions more strongly, compared to those without experience and males. In this report, the characteristics of human perception of dog facial expressions were clarified and the psychological processes involved were discussed. Understanding how humans perceive dogs' facial expressions may be useful in establishing a better relationship between humans and dogs.

Key words : dog facial expressions; emotional evaluation; gender; experience with dogs; DogFACS

*J. Anim. Edu. Ther.* 14: 1-7, 2023

#### 緒言

動物介在介入に参加するイヌの動物福祉を向上させるためには、イヌの感情状態を正確に把握することが重要となる。これまではカーミングシグナル (Rugaas 2006) 等のボディランゲージが用いられてきたが、表情の変化を調べることでより具体的に感情状態を推定できる可能性がある。ヒトの表情研究における代表的なツールとして Facial Action Coding System (FACS) があげられる (Ekman and Friesen 1978)。FACSは顔面の筋肉に基づいて表情の基本的な動き (Action Unit: AU) を定義し、各表情をAUの組み合

わせにより表すものである。その後、FACSはヒト以外の動物 (チンパンジー、オランウータン、ウマ等) にまで拡張された (Caeiro et al 2013; 2017a; Vick et al 2007; Wathan et al 2015)。イヌ用のFACSはDogFACSと呼ばれ (Waller et al 2013)、感情状態との対応関係に関する研究が進められている。

Caeiro et al (2017b) は、恐怖 (雷や嫌いな物の呈示等)、フラストレーション (見えているが取ることでできないおもちゃやエサの呈示等)、ポジティブ予期 (エサやエサの合図の呈示等)、幸福 (他のイヌとの遊び、飼い主との再会等)、リラックス (感情的な刺激

\*連絡先: inose@nvl.u.ac.jp (〒180-8602 東京都武蔵野市境南町1-7-1 日本獣医生命科学大学 比較発達心理学研究室)

の呈示なし)の各感情状態において撮影されたイヌの映像を用いて、DogFACSによるコード化を実施している。ヒトの映像と比較して恐怖でAD19(舌を見せる)、フラストレーションでAU45(まばたき)、ポジティブ予期でAD19とAD37(唇を舐める)、幸福でAD19、リラックスでAU1(眉の内側をあげる)のコードが増加していた。Bremhorst et al (2019)はラブラドル・レトリバーを対象に、実験的に統制された状況において感情を喚起させている。実験ではイヌが課題を実行すると、報酬としてエサがもらえるポジティブ感情条件と、課題を実行してもエサがもらえないネガティブ感情条件を設定した。実験の結果、ポジティブ感情条件でEAD102(耳を中央に寄せる)、ネガティブ感情条件でAU145(まばたき)、AU25(唇を離す)、AU26(顎を下げる)、AD137(鼻を舐める)、EAD103(耳を後ろに移動)のコードが増加していた。

上述した研究はイヌが感情を喚起した際にどのような表情を示すかを検討したものであるが、イヌの感情状態をより正確に把握するためには、ヒトがイヌの表情をどのように知覚するのかについても検討する必要がある。Bloom and Friedman (2013)は米国在住のイヌの飼育経験者および非飼育経験者を対象に、様々な表情を示すイヌの顔写真を呈示し、6つの基本感情(幸福・悲しみ・驚き・嫌悪・怒り・恐怖)について評定を求めた。データ分析の結果、どちらのグループもイヌの感情を同じように読み取っていたが、飼育経験者において全般的にイヌの表情に表れた感情をより高く評定する傾向があった。Schirmer et al (2013)は、イヌの顔全体および目元のみを呈示して(実験ではヒトの幼児の写真も呈示している)、感情評定を求めた。イヌの写真は快条件(おやつを見せる)、不快条件(クレートに入れる)およびベースライン条件から構成されていた。対象はイヌの飼育経験者もしくは非飼育経験者であるシンガポールの大学生であった。その結果、非飼育経験者であってもイヌの表情を判別することは可能であり、イヌの飼育経験者においては男性よりも女性において感情評定値が高くなっていた。Kujala et al (2017)の研究では、フィンランド在住の飼育経験者および非飼育経験者を対象としてイヌの顔写真を呈示し、6つの基本感情について評定を求めた。呈示された写真は快、中性、脅威の表情を示していた(人間の顔やオブジェクトの写真も呈示している)。分析の結果、参加者はイヌの表情もヒトの表情と同様に評定しており、イヌの飼育経験者は非飼育経験者よりも快表情および中性表情に対する評定値が高くなる傾向があった。

これまでのイヌの表情知覚研究からイヌの飼育経験

が表情知覚に影響していることは一貫して認められているが、性別の影響については一部の研究でのみ報告されている。一方、ヒトを対象とした研究においては女性のほうが男性よりも表情知覚が優れていることが示されており(Rotter and Rotter 1998; Thayer and Johnsen 2000; Hall and Matsumoto 2004; Montagne et al 2005)、ヒトの目元の表情から感情を推定するテストの得点は男性よりも女性において高い(Greenberga et al 2022)。イヌの表情知覚においても、男性よりも女性が優位である可能性がある。

本研究の目的は、ヒトがイヌの表情をどのように知覚するのかを明らかにすることである。イヌの飼育経験者および非飼育経験者を対象として、様々なイヌの表情写真に対する感情評定を求め、どのような表情が知覚されやすいのかDogFACSを用いて分析した。DogFACSを用いることにより、イヌの表情を客観的に捉えることが可能となる。また、イヌの表情知覚に対象者の飼育経験や性別等の属性がどのように影響しているのかについても併せて調べた。ヒトが読み取りやすいイヌの表情や、イヌの表情を読み取りやすいヒトの特性を明らかにすることで、イヌとヒトとの相互作用についての理解が深まり、より正確なイヌの感情推定が可能になるとと思われる。

## 方 法

### 1. 対象

日本在住の20歳から65歳の成人を対象にWeb調査を実施した。データ収集は調査会社(株式会社クロス・マーケティング)に依頼した。データ収集の際には、性別および飼育経験の有無ごとの人数が同程度になるように調整してもらった。調査期間は2021年1月6日から8日であった。参加者はアンケートに回答することで、調査会社から商品券等に交換できるポイントを得ることができた。Web画面上で調査内容やデータの取り扱い方等について文章による説明を行い、調査への参加に関する同意を得た。調査は無記名により行われ、個人を特定できる情報は取得していない。

### 2. 刺激

写真刺激には日本において人気のある3犬種(シバ、トイ・プードル、ゴールデン・レトリバー)を用いることとし、それぞれの飼い主に依頼して、撮影済みの写真を提供してもらった。各犬種について中性条件、快条件、不快条件、反省条件(落ち込んでいるように見える写真)の4刺激を、飼い主提供の写真の中から研究者2名および研究協力者1名の合意により選択した(Figure 1)。研究者はイヌを対象とした心理学的研究の実施経験があり、研究協力者は獣医

看護学を学んでいる大学生であった。ただし、反省条件については表情ではなく、体の動きが関わっているため本稿では報告しない。刺激はイヌの頭部全体が映っており、正面から撮影されているカラー画像であった。刺激の大きさは591×591ピクセルとし、背景は白色で統一した。

### 3. 統計解析

統計解析にはR (ver.4.2.2, <https://www.r-project.org/>) と anovakun (ver.4.8.6, <http://riseki.php.xdomain.jp/>) を用い、1標本のt検定および分散分析を実施した。

### 4. 質問項目

12の写真刺激(3犬種×4表情)に対して6つの基本感情について5段階での評定を求めた(1:全く当てはまらない, 2:やや当てはまらない, 3:どちらでもない, 4:やや当てはまる, 5:当てはまる)。基本感情はEkman (1973; 1982)と同様に「幸福・悲しみ・驚き・嫌悪・怒り・恐怖」の6つとした。写真刺激はWeb画面上にランダムな順序で呈示した。

上記項目に加えて対象者の属性を把握するため、性別、年齢、居住地域、イヌの飼育経験の有無、イヌに対する好悪感(1:好き, 2:やや好き, 3:どちらでもない, 4:やや嫌い, 5:嫌い)、イヌのイメージに関する質問項目、イヌに関わる幼少期の不快体験の有無についての項目が含まれていた。

## 結果

Web調査の結果、イヌの飼育経験者の男性81名(20～65歳、平均年齢38.6歳、標準偏差14.05)、女性82名(20～65歳、平均年齢43.0歳、標準偏差13.97)および非飼育経験の男性76名(20～65歳、平均年齢36.4歳、標準偏差12.59)、女性78名(20

～64歳、平均年齢39.0歳、標準偏差13.30)の計317名から回答を得ることができた。それら全てのデータを分析対象とした。

### 全般的な感情評定

それぞれの表情刺激に対して基本感情ごとの平均評定値を算出し、“どちらでもない”(5段階評定の3)との差について1標本のt検定を実施した(Table 1)。その結果、中性表情については、有意差は認められなかった。快表情については全て「幸福」の評定値が高くなっていった。不快表情については、シバとゴールデン・レトリバーにおいて「嫌悪」と「怒り」の評定値が高くなっていった。トイ・プードルの不快表情については、不快に分類される感情(悲しみ、驚く、嫌悪、怒り、恐怖)の平均評定値が全て“どちらでもない”よりも有意に高くなっていないため、不快表情刺激としての妥当性が低いと判断し、これ以降のデータ解析の対象から除外した。

### DogFACSによるコード化

DogFACSに基づく表情のコード化を実施した(Table 2)。コード化はDogFACS Coderとして認定されている研究者1名が行った。「幸福」と評定された快表情に含まれる共通要素としては、AU25(唇を離す)、AU26(顎を下げる)、AD19(舌を見せる)が認められた。「嫌悪・怒り」と評定された不快表情の共通要素としては、AU109+110(鼻に皺を寄せ、上唇を上げる)、AU116(下唇を下げる)、AU25(唇を離す)、AU26(顎を下げる)が認められた。

### 性別・飼育経験による影響

全般的な感情評定傾向の分析(Table 1)において評定値の有意な増加が認められた項目(快表情に対する「幸福」、不快表情に対する「嫌悪・怒り」)について、対象者の性別、飼育経験の有無ごとに平均評定値

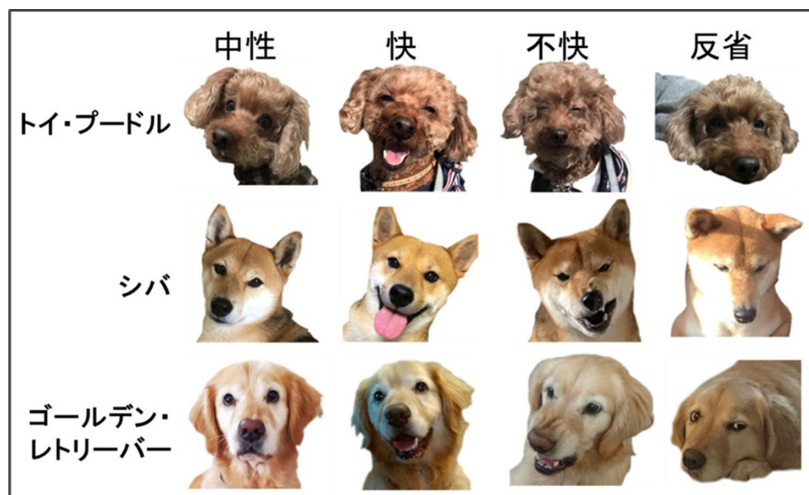


Figure 1 本研究で使用した刺激

**Table 1** 各表情刺激に対する平均感情評定値

表情	犬種	幸福	悲しみ	驚き	嫌悪	怒り	恐怖
中性	S	2.91	2.90	2.15▽	2.37▽	2.26▽	2.36▽
	GR	2.50▽	2.97	2.68▽	2.63▽	2.40▽	2.47▽
	TP	2.71▽	2.85▽	2.55▽	2.20▽	2.06▽	2.32▽
快	S	4.10▲	1.79▽	2.03▽	1.75▽	1.72▽	1.73▽
	GR	3.75▲	2.06▽	2.48▽	1.88▽	1.83▽	1.89▽
	TP	4.25▲	1.66▽	1.85▽	1.67▽	1.68▽	1.68▽
不快	S	1.74▽	2.05▽	2.25▽	3.70▲	4.22▲	2.88
	GR	2.04▽	2.20▽	2.52▽	3.55▲	3.85▲	2.93
	TP	2.77▽	2.74▽	2.20▽	2.48▽	2.24▽	2.35▽

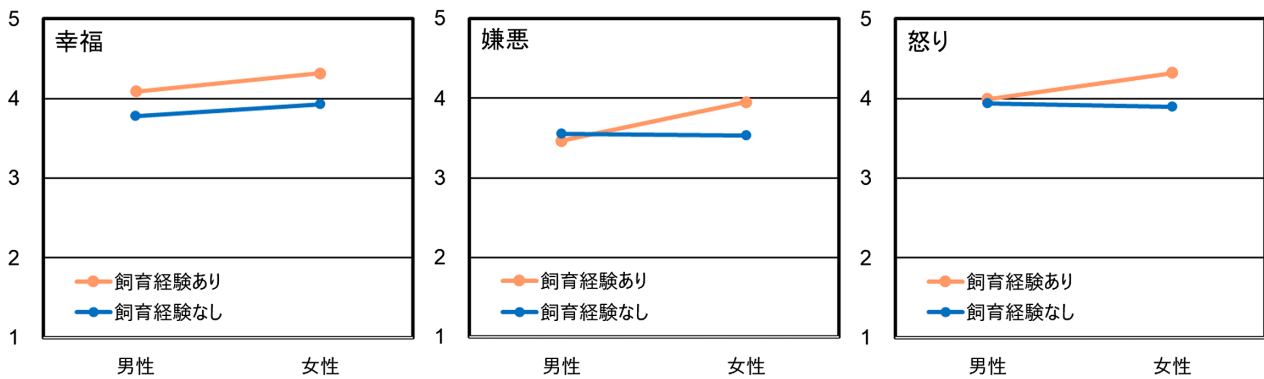
S：シバ、GR：ゴールデン・レトリバー、TP：トイ・プードル。

▲：どちらでもない（3）と比べて有意に高い（ $p < .05$ ）。

▽：どちらでもない（3）と比べて有意に低い（ $p < .05$ ）。

**Table 2** 各感情に認められた DogFACS コード

感情	DogFACS コード
幸福	AU25（唇を離す）、AU26（顎を下げる）、AD19（舌を見せる）
嫌悪・怒り	AU109+110（鼻に皺を寄せ、上唇を上げる）、AU116（下唇を下げる）、AU25（唇を離す）、AU26（顎を下げる）



**Figure 2** 各表情刺激に対する平均評定値

を算出した (Figure 2)。それらの平均評定値に対して、性別 (2) × 飼育経験 (2) の対応のない 2 要因の分散分析を実施した。

快表情に対する「幸福」評定値について分散分析を実施したところ、性別 ( $F(1,313) = 5.30, p < .05, \eta_p^2 = .017$ ) および飼育経験の主効果 ( $F(1,313) = 17.379, p < .001, \eta_p^2 = .053$ ) が有意であった。「幸福」得点は男性よりも女性において、非飼育経験者よりも飼育経験者において高くなっていた ( $p < .05$ )。女性

やイヌの飼育経験者において、表情に表れる感情をより高く評定する傾向があった。

不快表情に対する「嫌悪」評定値について分散分析を実施したところ、交互作用が有意であった ( $F(1,313) = 5.01, p < .05, \eta_p^2 = .016$ )。下位検定の結果、女性では非飼育経験者よりも経験者において、飼育経験者では男性よりも女性において「嫌悪」評定値が高くなっていた ( $p < .05$ )。不快表情に対する「怒り」評定値について分散分析を実施したところ、交互作用

が有意傾向であった ( $F(1,313)=3.585, p<.10, \eta_p^2=.011$ )。女性では非飼育経験者よりも経験者において、飼育経験者では男性よりも女性において「怒り」評定値は高くなっていた ( $p<.05$ )。「嫌悪」「怒り」ともに、女性の飼育経験者において、感情評定値がより高くなる傾向が認められた。

### イヌに対する好悪感

性別・飼育経験別のイヌに対する好悪感の平均評定値および標準偏差を Table 3 に示す。性別 (2) × 飼育経験 (2) の対応のない 2 要因の分散分析を実施したところ、飼育経験の主効果が有意であった ( $F(1,313)=119.98, p<.001, \eta_p^2=.277$ )。イヌへの好悪感是非飼育経験者よりも飼育経験者において評定値が高く、より好ましいと感じていた。好悪感における性差は認められなかった。

### 考察

本研究では、様々なイヌの表情画像を呈示し、それらに対する感情評定の結果から、対象者がイヌの表情をどのように知覚しているのかについて検討した。その結果、「幸福」「嫌悪」「怒り」の感情評定値が高い画像が確認された。DogFACS によるコードとの対応関係を調べたところ、軽く口を開き (AU25, AU26)、舌を出した (AD19) 表情は「幸福」、鼻に皺を寄せ、歯をむき出した (AU109+110, AU116, AU25, AU26) 表情は「怒り・嫌悪」と捉えられていることが明らかになった。イヌの感情喚起時の DogFACS コードを調べた先行研究 (Caeiro et al 2017b; Bremhorst et al 2019; 2022) と比較すると、快感情における舌見せ (AD19) や不快感情における顎を下げ、唇を離す (AU25, AU26) は一致していた。Caeiro et al (2017b) が指摘しているように、ヒトと比較してイヌは口や舌に関わるコードの出現が多く、目に関わるコードの出現が少ない傾向にある。先行研究において快感情で見られた EAD102 (耳を中央に寄せる) は本研究では認められなかった。これは本研究では静止画像を刺激として用いているため、耳の動きを捉えることが難しかったことに起因している。一方で、本研究において不快感情で認められた AU109+110 (鼻に皺を寄せ、上唇を上げる) は先行

研究では報告されていない。威嚇や攻撃行動を伴う感情喚起は実験的に制御することが難しく、イヌにストレスを与えることから動物福祉的な問題も生じるため実施が困難である可能性が考えられる。

対象者の属性との関連について分析した結果、男性よりも女性において、非飼育経験者よりも飼育経験者において、イヌの表情に表れる感情をより高く評定する傾向があった。飼育経験がイヌの表情知覚に影響することは、先行研究においても一貫して認められている (Bloom and Friedman 2013; Schirmer et al 2013; Kujala et al 2017)。飼育経験者はイヌとともに生活することで様々な感情表出場面に遭遇する機会が多いと考えられる。また、飼育経験者はイヌへの好悪感評定値も高いことから、自身の飼い犬に限らず、イヌや関連する情報に対して普段から注意を向けていることが予想され、それらの経験が明確な表情知覚を可能にしていると考えられる。

性別も表情知覚に影響しており、女性のほうが男性よりも評定値が高くなっていた。先行研究においては、本研究結果と同様に女性において評定値が高くなることを示す報告もあるが (Schirmer et al 2013)、一貫した傾向は認められていない。前述したように、これまでのヒトの表情知覚に関する研究においては、女性の優位性が報告されている (e.g., Rotter and Rotter 1998)。また、女性は男性よりも動物に対して高い共感を示し (Angantyr et al 2011)、女性のほうがイヌに対して擬人化する傾向が高いことが示されている (野瀬・柿沼 2022)。男性と比較して、女性はより共感的にイヌの感情を推定している可能性が示唆される。

Caeiro et al (2017b) はヒトがイヌの表情を知覚する際に、2つの方略が使用可能であると述べている。一つはメンタル・シミュレーション方略であり、イヌがヒトと同じように感情を表情に表していると仮定し、自身の表情表出に基づいてイヌの感情を推測するものである。もう一つは潜在的な社会学習方略であり、表情表出時の状況とイヌの動機づけの状態との連合学習に基づくものである。本研究結果も上記の仮説により解釈が可能であると考えられる。イヌの飼育経験者のほうが非飼育経験者よりも、イヌの表情が表す感情

Table 3 各群のイヌに対する好悪感の平均評定値と標準偏差

	飼育経験者		非飼育経験者	
	男性	女性	男性	女性
平均値	4.63	4.52	3.29	3.31
標準偏差	0.75	0.89	1.20	1.25

をより高く評定していた。これは潜在的な社会学習に基づくものであり、自らのイヌとの経験に基づいて推測していると思われる。また、男性よりも女性のほうが、よりイヌの表情表出を高く評定していた。女性は男性よりも共感性が高いことから (e.g., Greenberga et al 2022), この差異はメンタル・シミュレーション方略を反映している可能性がある。Caeiro et al (2017b) はイヌとヒトの表情は異なる部分も大きい。そのため、潜在的な社会学習方略が有効であると主張している。メンタル・シミュレーション方略は不正確な判断となる場合もあるが、非飼育経験者であってもイヌの表情をある程度正しく読み取れることも報告されており (Bloom and Friedman 2013; Schirmer et al 2013), この方略が部分的には当てはまっている可能性を示している。

本研究ではイヌの表情画像に対する評定結果から、ヒトがイヌの表情を知覚する際の傾向について明らかにし、その心的過程について考察した。イヌが感情喚起時にどのような表情を示すかだけでなく、イヌの表情をヒトがどのように知覚するかについても検討することで、ヒトとイヌの相互作用についての理解が深まる。動物介在介入における動物の要求に適切に応え、咬傷事故等を予防することが容易となり、ヒトとイヌの双方の福祉が向上することが期待される。

最後に、本研究の限界と今後の課題について述べる。DogFACSによるコード化の結果、主に口周りの表情が感情知覚に関わっていることが示された。しかし、本研究ではイヌの写真を刺激として用いており、動きを伴う表情は反映されにくい。特に目 (まばたき、閉眼) や耳の動きはコード化が困難となっている。今後は動画刺激を用いることで、それらの影響についても検討する必要がある。さらに、本研究で使用した写真は飼い主が個人的に撮影したものであり、どのような状況で表出された表情であるかは記録されていなかった。感情が表出された文脈と知覚されやすい表情との対応関係については今後の研究によって明らかにしなければならない。

## 謝 辞

本研究で使用した写真刺激の作成は、2020年度日本獣医生命科学大学卒業生である佐藤やえさん、嘉村雪月さんに協力して頂きました。

## 倫理審査

著者らが所属する機関の倫理委員会の規定により個人情報収集しない匿名で行われる調査は審査を受ける必要がないため、本研究は倫理審査を受けていない。

## 利益相反

本研究に関して開示すべき利益相反はない。

## 文 献

- Angantyr M, Eklund J, Hansen EM 2011. A comparison of empathy for humans and empathy for animals. *Anthrozoos*, 24, 369-377.
- Bloom T, Friedman H 2013. Classifying dogs' (Canis familiaris) facial expressions from photographs. *Behavioural Processes*, 96, 1-10.
- Bremhorst A, Mills DS, Würbel H, Riemer S. 2022. Evaluating the accuracy of facial expressions as emotion indicators across contexts in dogs. *Animal Cognition*, 25, 121-136.
- Bremhorst A, Sutter NA, Würbel H, Mills DS, Riemer S 2019. Differences in facial expressions during positive anticipation and frustration in dogs awaiting a reward. *Scientific Reports*, 9, 19312.
- Caeiro CC, Burrows AM, Waller BM, 2017a. Development and application of CatFACS: Are human cat adopters influenced by cat facial expressions? *Applied Animal Behavior Science* 189, 66-78.
- Caeiro C, Guo K, Mills D 2017b. Dogs and humans respond to emotionally competent stimuli by producing different facial actions. *Scientific Reports*, 7, 15525.
- Caeiro CC, Waller BM, Burrows AM, Zimmermann E, Davila-Ross M 2013. OrangFACS: A muscle-based coding system for orangutan facial movements. *International Journal of Primatology*, 34, 115-129.
- Ekman P 1973. Darwin and facial expressions. Academic Press.
- Ekman P 1982. *Emotion in the human face*, 2nd ed. Cambridge University Press.
- Ekman P, Friesen WV 1978. *Facial action coding system*. Consulting Psychology Press.
- Greenberga DM, Warriera V, Allisona C, Baron-Cohen S 2022. Testing the empathizing-systemizing theory of sex differences and the extreme male brain theory of autism in half a million people. *PNAS*, 115, 12152-12157.
- Hall JA, Matsumoto D 2004. Gender differences in judgments of multiple emotions from facial expressions. *Emotion*, 4, 201-206.
- Kujala MV, Somppi S, Jokela M, Vainio O, Parkkonen L. 2017. Human empathy, personality and experience affect the emotion ratings of dog and human facial expressions. *PLOS ONE*, 12, e0170730.
- Montagne B, Kessels RPC, Frigerio E, de Haan EHF, Perrett DI 2005. Sex differences in the perception of affective facial expressions: Do men really lack emotional sensitivity? *Cognitive Processing*, 6, 136-141.
- 野瀬出・柿沼美紀 2022. 人は柴犬の表情をどのように知覚しているか 日本心理学会第86回大会抄録, 2PM-054-PM.
- Rotter NG, Rotter GS 1998. Sex differences in the encoding and decoding of negative facial emotions. *Journal of Nonverbal Behavior*, 12, 139-148.

- Rugaas T 2006. On talking terms with dogs: Calming signals. Dogwise Publishing.
- Schirmer A, Seow CS, Penney TB. 2013. Humans process dog and human facial affect in similar ways. PLoS ONE, 8, e74591.
- Thayer JF, Johnsen BH 2000. Sex differences in judgment of facial affect: a multivariate analysis of recognition errors. Scandinavian Journal of Psychology, 41, 243-246.
- Vick SJ, Waller BM, Parr LA, Smith Pasaqualini MC, Bard KA 2007. A cross-species comparison of facial morphology and movement in humans and chimpanzees using the facial action coding system (FACS). Journal of Nonverbal Behaviour, 31, 1-20.
- Waller BM, Peirce K, Caeiro CC, Scheider L, Burrows AM, McCune S, Kaminski J 2013. Paedomorphic facial expressions give dogs a selective advantage. PLoS ONE, 8, e82686.
- Wathan J, Burrows AM, Waller BM, McComb K, 2015. EquiFACS: The equine facial action coding system. PLoS ONE 10, e0131738.

---

イヌの表情はどのように知覚されるか：性別および飼育経験による影響

野瀬 出・柿沼美紀

日本獣医生命科学大学 比較発達心理学研究室

(2023年2月15日受付/2023年3月26日受理)

**要約：**イヌの動物福祉を向上させるためには感情状態を適切に把握する必要があるが、感情を評価するためのツールは確立されていない。評価方法の一つとして、表情が使用出来る可能性が指摘されている。本研究では対象者にイヌの表情画像に対する感情評定を求め、イヌの表情符号化システム (DogFACS) を用いて表情と知覚された感情との関係について調べるとともに、対象者のイヌ飼育経験や性別との関係について検討した。分析の結果、口を開け、舌を見せる表情は「幸福」、鼻に皺を寄せ、歯をむき出しにする表情は「嫌悪・怒り」と知覚されやすいことが明らかになった。また、男性よりも女性において、非飼育経験者よりも飼育経験者において、イヌの表情に表れる感情をより高く評定していた。本報告では、イヌの表情評定に関わる要因を明らかにし、その基盤となる心的過程について議論した。ヒトがイヌの表情をどのように知覚しているのか、その特性を把握しておくことは、ヒトとイヌのより良い関係を構築する際に有用であると考えられる。

**キーワード：**イヌの表情, 感情評定, 性別, 飼育経験, DogFACS

*J. Anim. Edu. Ther.* 14: 1-7, 2023

---